

民族関係と農村開発

掛谷 誠（京都大学大学院教授）

ここ数年、同僚の伊谷樹一さんや大学院生の神田靖範さんとともに、タンザニア西部のウソチェ村で農村研究と開発実践をつなぐ試みを続けている。ウソチェ村は、アカシアやシクンシ科の樹木などの疎開林が広がる半乾燥地域にある。この村は約390世帯から構成されており、もともとの住民は農耕民のワンダだが、1980年代初頭から半農半牧民のスクマが移住し、現在は二つの民族が共生している。2004年の8月からほぼ1年間、神田さんは村に住み込み、調査を進め、住民との信頼関係を構築した。彼は、長年、国際協力・援助に携わってきたが、地域研究をとおして開発について再考したいと願っていたのである。

タンザニアの独立以前、ウソチェ村ではシコクビエの焼畑耕作が中心の生業システムだったが、徐々に牛飼養と牛耕が浸透しつつあった。集村化を基本としたタンザニア独自の社会主義政策が強力に推し進められた1974年頃に、牛耕によるモロコシの常畑耕作が広く普及した。1982年から、それまで畑作には適さないと思われていたアカシア林に、スクマが移住してきた。そこは、地表近くに不透水層があり、雨季には雨水で浸水しがちな土地だった。スクマは牛に強く執着する人々だが、一方で、古くから水田稲作を生業の一部に取り入れてきた。移住してきたスクマはアカシア林を伐採し、畦畔を造成して苗を移植する水田稲作を始めた。ワンダの人々は、スクマの動きをつぶさに観察し、ときにはスクマに雇われて田植えなどの農作業に従事した。そして、ワンダ自身も水田の開墾を始めた。この頃、タンザニア政府は構造調整政策を受け入れ、急激に経済の自由化を進めた。村人は換金作物としてのコメの重要性を再認識し、水田稲作は急速に拡大していった。スクマは、いわば草の根のイノベーターの役割を果たし、民族の共生的な関係が村の発展をもたらしたのである。このような歴史的な過程から、私たちは多くのことを学んだ。

調査を始めた頃には、水田の拡大、牛の放牧地や林の減少などが相互に関係して、ウソチェ村の全体としての生業システムはクリティカルな状況に直面していたのである。私たちは、村会議が選んだグループのメンバーと話し合い、村の生業システムが抱える問題の解決に向けて計画を立て、活動を開始した。それは、ワンダとスクマに日本人が加わり、村レベルで「民族」の交流を深め、研究と開発実践をつなげていくプロセスであった。